

『三玉挑事抄』注釈 冬部（下）・雑部（三）

岩 坪 健

本稿は『三玉挑事抄』冬部の314～332番と、雑部635～664番を掲載する。凡例は秋部（上）と同じであるので省略する。担当者はすべて本学博士課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（ ）内には、担当者の氏名を示した。

村上泰規、島田薫、松本匡由、金子将大、小森一輝、北井達也、松田望

冬夜

314うたふよの雲井の庭火ほのくくと明し岩戸を残すおもかけ

〔出典〕雪玉集、四一八五番。〔異同〕『新編国歌大観』「冬夜―夜」。

〔訳〕 冬の夜

（神楽を）歌う夜は宮中のかがり火がほのかに明るく、夜がほんのりと明け、（天照大御神が）岩戸を開けた（という神代の神楽の）おもかけを残しているなあ。

〔考察〕当歌の第三句「ほのほのと」は「庭火」と「明けし」を修飾する。また第四句「あけし」に「明けし」と「明けし」を掛ける。天照大御神が岩戸を開けると夜が明けたという伝説については315番歌、参照。宮中で一晚中、神楽が催され、その間燃え続けていた篝火も夜明け前には火が弱まるさまを詠む。

(村上泰規)

神楽

315相そのかみの岩戸はしらす明る夜のおしくやはあらぬうたふ声く

古語拾遺曰、其後素戔鳴神、奉為日神、行甚無狀云云。于時天照太神赫怒、入于天石窟、閉磐戸而幽居焉。尔乃六合常闇、昼夜不分。群神愁迷手足罔措。凡厥庶事、燎燭而弁云云。於石窟戸前覆誓槽、拳庭燎、巧作俳優、相与歌舞云云。于時天照太神中心独謂、「此吾幽居天下悉闇。群神何由如此歌楽」。聊開戸而窺之。爰令天手力雄神引啓其扉、遷座新殿云云。当此之時、上天初晴、衆俱相見、面皆明白。伸手歌舞。相与称曰云云。

〔出典〕柏玉集、一一三三二番。古語拾遺。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『校正古語拾遺』「天照太神―天照大神」。

〔訳〕 神楽

その昔、あの神の(籠もった)岩戸はいざ知らず、夜が明け(て神楽が終わ)るのは名残惜しくないだろうか、(神楽を)歌う声々(を聞くと)。

古語拾遺によると、その後、素戔鳴神の行為は天照大神にとって、非常に乱暴なものであった云々。その時、天照大神はお怒りになって天の岩屋にお入りになり、岩戸を閉ざして籠もられた。するとたちまち天地四方が

暗闇に包まれ、昼と夜の境がつかなくなった。諸々の神は皆困り果てて、なすすべがない。すべて多くの事は、火を灯して話し合った云々。岩屋の戸の前で誓約をして、庭火を焚き、巧みに装って一斉に歌い踊った云々。そのとき天照大神は心中で、「私が籠もって天下はすべて暗闇になった。諸々の神たちはどういうわけで、このように歌と音楽を演奏するのか」と独り言を仰った。(天照大神は) 少しでも戸を開いて外を覗いてみた。すかさず天手力雄神にその戸を開かせて、(天照大神を) 新殿にお移した云々。すると天上はようやく晴れ、諸々の神たちは顔を見合わせて顔面はみな明るくなった。手を広げて歌い舞い、互いに称えあつて言うには云々。

〔考察〕当歌は初句の「そのかみ」に「其上^{かみ}」と「その神」を掛ける。314・315番歌は『古語拾遺』のほか、記紀にも見える有名な岩戸隠れ伝説を踏まえる。

〔参考〕本文異同には元禄九年(一六九六)跋、文化四年(一八〇七)版『校正古語拾遺』を使用。『古語拾遺』の版本については、『飯田瑞穂著作集 古代史籍の研究』(吉川弘文館、二〇〇一年)参照。なお『梁塵愚案抄』(巻上、神楽、庭燎)に収められた本文は「天照太神」で、「云々」の本文も全箇所ではないが一致する。

冬歌中

316 ちる雪もかたにかゝりて吹風からおきうたふ声そさひたる

梁塵秘抄、韓神。みしまゆふ、かたにとりかけ、われから神の、からをさせんや、からをさ下略。

〔出典〕雪玉集、六七三八番。神楽歌、韓神、四二頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「冬歌中―冬十五首」。『梁塵愚案抄』ナシ。

〔訳〕 冬の歌の中

降る雪も(三鳥産の木綿の襷のように)肩にかかって、吹く風に韓招ぎを歌う声は古びて趣があるなあ。

梁塵愚案抄、韓神。三鳥産の木綿の襷を肩に取りかけて、自分韓神は韓招ぎをしようよ、韓招ぎを下略。

〔考察〕「韓神」は神楽歌の採物の歌で、本文中の「われから神」の「韓神」については318番歌、参照。「韓招ぎ」は『梁塵愚案抄』によると、「からをき未詳。たとへは神を祭とて神前にひもろきなどをすへをきたる心とや。」とある。「ひもろき」は神を迎えるため注連縄を張り、中央に神を立てたもの。

〔参考〕異同の確認には『梁塵愚案抄』元禄二年(一六八九)版(早稲田大学古典籍総合データベース)を使用。

(島田薫)

神楽

317御火相白くたくよの空はさなからにひるめの神の光をそみる

神代巻曰、於是共生日神。号大日靈貴。此子光華明彩、照徹於六合之内云云。

〔出典〕雪玉集、三七二〇番。日本書紀、卷第一、神代上、三五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『日本書紀』「靈―靈」。

〔訳〕 神楽

かがり火を白く燃やす夜空(の明るさ)は、あたかも天照大神の光を見るようだなあ。

神代巻によると、(伊弉諾尊と伊弉冉尊は)そこで一緒に日の神をお生みになった。これを大日靈貴(天照

大神」と申す。この御子は輝くこと明るく美しく、天地四方の隅々まで照り輝いた云々。

〔参考〕初句・二句の「御火白く焚く」は、神楽歌次第の「御火白呂久献つ礼」（御火白くたてまつれ）を、源俊頼が「からかみに袖ふるほどはとのもりのともの宮つこ御火しろくたけ」（堀川百首・冬・神楽）に詠みこみ、それが後世に影響を与えた（内藤愛子「堀河百首題」「神楽」をめぐって）、「文教大学女子短期大学部研究紀要」41、一九九七年（二月）。

（島田薫）

318名もしるしやまとはあらぬから神のはるかにすめる明かたの声

神楽、韓神。まへに見えたり。

梁塵愚案抄云、から神とは宮内省にまします韓神、二座を申侍にや云々。

〔出典〕雪玉集、一七六二番。梁塵愚案抄、上、韓神。〔異同〕『新編国歌大観』『梁塵愚案抄』ナシ。

〔訳〕（神楽）

その名の通りだ。韓神は大和（日本）にはおらず（韓国という）遙か遠くに住んでいるが、神楽の「韓神」を歌う声がとても清らかな明け方だなあ。

神楽、韓神。前に見えている。（316番歌、参照）

梁塵愚案抄によると、から神とは宮内省にいらっしやる二体の韓神を申しますとか云々。

〔考察〕当歌の第三句「韓神」に神の名と神楽歌の名を掛け、第四句「はるかにすめる」に「遙かに住める」と「はるかに澄める」を掛ける。

〔参考〕雪玉集は歌肩に「永正二十二御月次」とあり、永正十二年(一五一五)十二月の月次歌。

杜神楽

319 外山柏なる正木はいかに冬かれの杜もあらはに庭火たく影

梁塵秘抄、神楽、庭燎。

太山にはあられ降らし外山なる正木のかつら色つきにけり。

〔出典〕柏玉集、一二三三番。神楽歌、庭火、二七頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「杜も―森も」「庭火たく―庭火烧く」。『梁塵愚案抄』ナシ。

〔訳〕 杜もりの神楽

人里近くの山にある真拆まささきはどうなっているだろうか。冬になって枯れた森もあらわに(見えるほど)庭火を焚く炎
だなあ。

梁塵愚案抄、神楽、庭火。

奥深い山では霰が降っているにちがいない。人里に近い山にある真拆まささきの葛かずらは紅葉したなあ。

〔考察〕「庭火」は神楽を演奏するときに焚く篝火かがりび。「真拆まささき」は定家ていか葛かずらの古称で、神事に用いる。「杜もり」は神霊の寄りつく樹木が茂った神社などの霊域。

〔参考〕「みやまには」の和歌は『古今和歌集』『和歌体十種』『和歌九品』にも収められた名歌。

(金子将大)

(島田薫)

320その駒も声神さひてすめるよにまたふみならず杜の下草

同、其駒。その駒そや我にわれくさかふ草はとりかはん轡とり草はとりかはん。

〔出典〕雪玉集、一七六六番。神楽歌、其駒、九〇頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『梁塵愚案抄』「くさかふくさこふ」。

〔訳〕（杜の神楽）

神楽歌の「其駒」を歌う声もその駒の鳴き声も神々しく澄んでいて、澄んだ夜にまた（楽人と駒が）踏み鳴らす杜の下草だなあ。

同（梁塵愚案抄、神楽、其駒そのこま）。その駒がよ、や、私に私は草を与える。草を取って与えよう。轡くわを与え、草を取って与えよう。

〔考察〕「其駒」は婚歌よばいごとを神送りの歌に転用したもので、愛馬をねぎらう様を歌う。当歌は初句の「その駒」に神楽歌の名と馬を掛け、第三句の「すめる」は楽人と馬の澄んだ声と澄んだ夜を意味する。本文異同で「草飼ふ」は草を与える、「草乞ふ」は草を求める、と意味が異なる。

〔参考〕雪玉集は歌肩に「永正六十二御月次」とあり、永正六年（一五〇九）十二月の月次歌。

（金子将大）

閑居埋火

321いまは身の心もさむき灰と成て世の春しらぬ埋火のもと

莊子。形ハ固ニ可レ使レ如ニ槁木、心ハ固ニ可レ使レ如ニ死灰一乎。

杜詩。心死シテ著ニ寒ニ灰ニ。

〔出典〕雪玉集、三六二番。莊子、齊物論第二、一五二頁。杜詩集註、卷一六、喜達行在所三首。

〔異同〕『新編国歌大観』『莊子』『杜詩集註』ナシ。

〔訳〕 閑居の埋火

今は我が身の心も冷たい灰となって、世間の春を知らない埋火のもとにある(ようだ)なあ。

莊子。外形は枯木のようにでき、心は冷えた灰のようにできるものなのだろうか。

杜甫の詩。心は死んで、冷たい灰を抱えているかのようだった。

〔考察〕「埋火」は炉や火鉢などの灰にうずめた炭火。『莊子』は人知によって作られる事象を次々に批判する一篇で、当該箇所は「吾、我を喪へり」の状態である人を形容する。『杜詩』は杜甫が長安を脱出して行在所あんざいしょにたどり着く

までの気持ちを詠んだ詩の一節。当歌はこれらを踏まえ、世間から忘れ去られた人の心が冷たい灰となった様を詠む。

〔参考〕『杜詩集註』の本文異同には明暦二年(一六五六)刊『杜詩集註』(『和刻本漢詩集成』4所収)を使用。

(金子将大)

五節

322から玉を袂にまきし乙女子かすかた隔ぬ雲のうへかも

〔出典〕雪玉集、四三〇六番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 五節

美しい玉を袂にまいた乙女子の姿は、雲で隔たれることのない宮中（で見られるの）だなあ。

〔考察〕当歌は結句「雲の上」に内裏の意味を掛け、323番歌の典拠（天武天皇の前に現れた神女が雲の上で五節を舞った）を踏まえ、宮中で舞う五節の舞姫を詠む。五節は奈良時代以後、大嘗会だいじょうえおよび毎年陰曆十一月の新嘗会しんじょうえに行なわれた、五節の舞を中心とする行事。

（北井達也）

323乙女子か立まふけふのためしにもうつすよしの、山あゐの袖

河海抄引

本朝月令ワラ曰、五節ノ舞ハ者、淨御原天皇之所レ製也。相伝曰、天皇御ニ吉野ノ宮ニ、日暮彈レ琴有レ興。俄尔ノ之間

前岫ノ之下、雲氣忽ニ起ル。疑ニ如ニ高唐神女一。髻髻応レ曲而舞。独リ入ニ天ノ曠ニ他人無レ見。挙コト袖ヲ五変、故ニ謂ニ之ヲ五ノ節一。其ノ歌ニ曰、乎度綿度茂邕度綿左備須茂可良多万乎多茂度迹麻岐底乎度綿左備須茂。

〔出典〕雪玉集、二二三五八番。河海抄、卷九、乙通女の卷。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『河海抄』「天皇之所製也―天皇之所制也」「他人無見―他人不見」「邕度綿左備須茂―邕度綿左備須毛」。

〔訳〕（五節）

（五節で）乙女子が立って舞う今日の儀礼にも模倣されている、吉野の山間で山藍の袖（を五回、神女が翻したこと）だなあ。

河海抄に引用された本朝月令によると、五節の舞は淨御原天皇（天武天皇）の作である。相伝によると、天皇が吉野宮に行幸して、日が暮れ琴を奏でて楽しんでいた。少しすると、前の山頂の下に、雲気が突然起こっ

た。(天皇は)高唐の神女のようにだと怪しんだ。(神女は)ありありと見えて、曲に合わせて舞う。(天皇だけ)独り天を見て、他人には見えなかった。(神女は)袖を挙げて五回翻したため、これを五節と言う。その歌によると、乙女たちは乙女らしくふるまうなあ。美しい玉を袂にまいて乙女らしくふるまうなあ。

〔考察〕322・323番歌は『本朝月令』^{げつれい}に記された五節の起源の内容を踏まえる。323番歌は、吉野の山で舞った神女が袖を五回ひらめかしたことが、今日の五節の舞にも模倣されていると詠む。「高唐神女」とは『文選』(卷十九、情賦)の宋玉の「高唐賦」「神女賦」に登場する巫山の神女を意味する。「高唐賦」に関しては269番歌、参照。当歌の「よしの、山あるの袖」は「吉野の山」と「山藍の袖」を掛ける。「山藍」は草の名で、葉の汁を薄藍色の染料に用いる。

〔参考〕「娘子らが 娘子さびすと 韓玉を 手元に巻かし」(万葉集、卷五、八〇四番、山上憶良の長歌)。

(北井達也)

仏名会

324たふさより花もひらくる春や今三世の仏のひかり成らん

朗詠集、仏名、菅丞相。香ノ自禪心_ニ無_レ用_レ火。花ハ開_ニ合_レ掌_ニ不_レ因_レ春_ニ。

〔出典〕雪玉集、一七六八番。和漢朗詠集、卷上、冬、仏名、三九四番。

〔異同〕『新編国歌大観』『和漢朗詠集註』ナシ。

〔訳〕 仏名会

(合掌すると) 手元から(心の)花も開く春こそ、今や三世の仏の光明であるだろう。

和漢朗詠集、仏名、菅原道真。座禪で精神を統一した心であれば、火を用いて香をたく必要はない。また、心から合掌して仏に祈れば心の花が開き、春を待つて花を供えるまでもない。

〔考察〕当歌は、菅原道真が仏名会の際に詠んだ漢詩を踏まえ、まだ冬だが仏名会で合掌すると心の花が開き春が訪れ、仏の光に満ちあふれると詠む。当歌の第四句「三世」は前世・現世・来世を指す。

〔参考〕歌題の「仏名」とは仏名会のこと。陰暦十二月十九日より三日間、禁中および諸寺院で仏名経を誦し、三世十方の諸仏の名号を唱えて罪障を懺悔する法会。「菅丞相」の丞相は天子を助けて政治を行なう最高の官。

(北井達也)

325むさしの、草も仏のみなからにとなふる三世の外のためか

仏名経曰、普^ク礼^ニ一切十方三世諸仏、三^ニ塗^ノ苦息国豊^{ナリ}云云。

〔出典〕雪玉集、四三二二番。三千仏名経。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『三千仏名経』「三塗苦息―願三塗休息」。

〔訳〕(仏名会)

武蔵野の草であっても仏の御名を唱えれば、生きたまま仏になる善根は、三世の外にあるだろうか。いや、そのようなことはない。

仏名経によると、広く一切十方の三世諸仏を礼拝すれば、三途の苦しみもたえ、国も豊かになる云々。

〔考察〕当歌は三世(前世・現世・来世)において、仏名を唱えれば仏身になると詠む。結句の「種」は「仏の種」で、成仏するための善根・功德を種にたとえたもの。「草」「実」「種」が縁語。第二・三句に「仏の御名」と「身

ながら」(人の身のまま、という意)を掛ける。また、上の句の「武蔵野の草も」と「みながら」は、「紫のひともとゆゑに武蔵野の草もみながらあはれとぞ見る」(古今和歌集、卷十七、雑、八六七番、詠み人知らず)による。

〔参考〕『三千仏名経』は出典の一節を含む過去莊嚴劫千仏名経のほか、現在賢劫千仏名経と未來星宿劫千仏名経より構成される。『三玉絵』下「十二月 仏名」(新日本古典文学大系31、二二三頁)に仏名経の抄訳として、「我今諸仏ヲヲガミタテマツル、願ハ三途ノヤミヲ息、国ユタカニ」とある。「三途」は地獄・餓鬼・畜生の三悪道。

早梅

(小森一輝)

326 雪のうちにひとりも春を白波の名に立梅の花の色かな

後漢書。靈帝紀註曰、黄巾郭泰等起於西河、白波、谷謂之白波、賊云云。

〔出典〕雪玉集、七九三五番。後漢書、第九、獻帝紀、中平六年十月。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『後漢書』「謂之―時謂之」。

〔訳〕 早梅

雪の中でまだ誰ひとりも春を知らないのに、白波が立つように、名を揚げる梅の花の色だなあ。

後漢書の靈帝紀の注によると、黄巾賊の郭泰らが西河の白波谷で蜂起し、これを白波賊と言った云々。

〔考察〕当歌は第三句の「白波」に「知らな」を掛け、また「立つ」に「白波」が「立つ」と「名に立つ」(評判になる)を重ねる。

〔参考〕『後漢書』の「白波賊」から「白波」は盗賊の異称になる。なお「靈帝紀註曰」とあるが、『後漢書』第八、

靈帝紀（長澤規矩也『和刻本正史 後漢書』古典研究会 一九九一年）には、「黃巾ノ余賊郭大等起_{ニテ}於西河ノ白波谷_ニ寇_ス太原河東_ニ」（中平五年二月）、「南单于叛与_ニ白波賊_ニ寇_レ東_ニ」（同年九月）とあり本文が一致しないので、出典は獻帝紀とした。

（小森一輝）

年内早梅

327^柏としさむき松をはいはし霜雪に先あらはる、梅の一花

朗詠集句、見于秋部。

〔出典〕 柏玉集、一二三六番。〔異同〕 『新編国歌大観』「雪に―雪の」。

〔訳〕 年内の早梅

寒い冬に（緑を保つ）松については（その美徳が説かれているから）もう言うまでもない。霜や雪の中から真っ先に咲く梅の一輪（は格別だなあ）。

和漢朗詠集の句で、秋の部に見える。（166番歌、参照。）

〔参考〕 当歌の初句「としさむき」は、「子曰、歳寒然後知_ニ松柏之後_レ凋也_一」（『論語』子罕）による。寒い冬に他の植物はしおれても、松や兎手柏は緑の色を保つという意味。

（小森一輝）

冬歌中

328年くる、なやらふ外へ弓矢とて手もふれぬ世にかへる時かも

『三玉挑事抄』注釈 冬部（下）・雑部（三）

〔出典〕雪玉集、七二七番。〔異同〕『新編国歌大観』「なやらふ外へ―なやらふ外は」。

〔訳〕 冬歌の中

年の暮れに鬼遣おにやらいをする以外には、弓矢に手も触れない(平和な)世の中に戻った時世であるなあ。

〔考察〕第二句「儼遣ひやらふ」の「儼」は鬼、「遣らふ」は追い払うという意味。疫鬼を追い払う中国の追儼ひやの行事が日本に伝わり、宮中では大晦日の夜、鬼に扮した舍人を殿上人らが桃の杖と桃の弓、芦の矢で追いかけて逃走させるという儀式になった。江戸時代の初めには廃絶したが、各地の社寺や民間には節分の行事として今も伝わり、豆まきをする。追儼については、329番歌の出典を参照。

(松本匡由)

追儼

329碧おしますやこよひなやらふ芦の矢のあしからすしてくる、一年

追儼。江次第曰、陰陽寮以_二桃杖弓芦矢_一進_三上卿以下_二云云。

張衡、東京ノ賦曰、卒_リッ歳_ニ大_ニ儼驅_ヲ除群_一癘_ヲ云云。桃ノ弧棘_ノ矢所_レ発無_レ泉。

〔出典〕該当歌なし。江次第第、卷一一、一二月、追儼。文選、賦篇上、一七三頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『江次第』ナシ。『文選』「驅除」毆除。

〔訳〕 追儼

惜しくは思わないなあ。今夜、追儼をするために芦の矢を放つが、芦の矢の「悪あし」ではないが、悪いことはなく暮れていく一年を。

追儼。江家次第によると、陰陽寮は桃の杖、弓、芦の矢を用意して、上卿以下の人々にさしあげる云々。

張衡の東京賦によると、年の暮れに、盛大に鬼遣おこやらいの儀が催され、諸々の悪鬼をたたき出す云々。桃の弓に棘の矢をつがえ、ところ定めず矢を飛ばす。

〔考察〕 328番歌と同じく、『江家次第』と張衡『東京賦』にある追儼の内容を踏まえ、宮中の年暮の様子を詠む。当歌は追儼に用いる芦の矢の「芦」が「悪し」を導く。『東京賦』の本文で「臬ま」は弓的の意味する。『江家次第』の「陰陽寮」とは大寶・養老令制下の官司、中務省なかつかきしょうの被管で、天文・氣象の観測や、曆の作成、時刻の測定などを職掌とする。

〔参考〕 出典の「江次第」こと『江家次第』は平安後期の有職故実書。天永二年（一一一一）頃の成立。関白藤原師通の依頼により大江匡房が、恒例、臨時の儀式や行事について詳述したもの。承応二年（一六五三）跋の版本を使用。

張衡は後漢の文人、科学者。安帝に招かれ太史令となり、一種の天球儀である「渾天儀」や地震計のような「候風地動儀」などを製作。また賦文も巧みで、「二京賦」（洛陽を描いた「東京賦」と長安を描いた「西京賦」）や「帰田賦」がある。

（松本匡由）

河歳暮

330 立田川もみちも花もなかれてはよるのにしきとくる、年かな

漢書。朱買臣伝云、上拜買臣ヲ会稽太守ニ。上謂買臣曰、「富貴ニシテ不レ帰ハ故郷ニ如ニ衣繡ヲ夜行」。今、子

如何」。買臣頓首シテ謝ス。

〔出典〕雪玉集、一七七六番。漢書、卷六四、朱買臣。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『漢書』「如何—何如」「謝—辭謝」。

〔訳〕 河の歳暮

立田川に（錦のように美しい）紅葉や花が流れても、夜は見えぬ甲斐がないように、はかなく暮れる年であるなあ。

漢書の朱買臣伝によると、主上は朱買臣を会稽郡の太守に任命した。主上が買臣に言うには、「財をなし、高位について故郷へ帰らないのは、錦の衣を着て夜道を行くのと同じだ。今、あなたはどのように思うか」。朱買臣は頭を地にすりつけて拝礼し、お礼の言葉を述べた。

〔考察〕『漢書』列伝の朱買臣伝は、朱買臣が東越討伐のため会稽郡の太守に任命された場面。錦の衣を着て夜道を歩いても誰にも気づいてもらえないことから転じて、「夜の錦」は立身出世や成功を収めても人に知ってもらえないことの例え。また無意味なこと、甲斐のないことの比喩。例「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」（古今和歌集、巻五、秋下、二九七番、紀貫之）。当歌に詠まれた竜田川は紅葉の名所。なお『史記』項羽伝には「富貴不帰故郷、如衣錦夜行」とあり、これは楚の項羽が秦の都、咸陽を攻略した際、臣下の韓生がそこに遷都することを勧めたが、項羽は帰郷の心が強く、それを否定したことから出た言葉。

〔参考〕異同の確認には明暦（一六五五～一六五七年）刊本（『和国本正史 漢書 二』汲古書院、一九七二年）を用。雪玉集の歌肩には「永正三十二御月次」とあり、当歌は永正三年（一五〇六）十二月の月次歌。

(村上泰規)

家々歳暮

331 春をまつ家ゐはさそな数ならぬ垣ねのうちも年そくれぬる

初子の巻の詞、まへに見えたり。

〔出典〕雪玉集、二二八〇九番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 家々の歳暮

春を待つ家（の人）はさぞかし（年が暮れ春が来るのを待っているだろう）。物の数にも入らない低い身分の者の（住む家の）垣根の中にも、年は暮れるのだなあ。

初音の巻の言葉は、前に見えている。（10番歌、参照）

〔考察〕当歌は10番歌と同様、光源氏の造営した六条院が初めて新年を迎え、その庭の景色を描写した場面を踏まえる。初音の巻頭には、「年たちかへる朝の空のけしき、なごりなく曇らぬうららけさには、数ならぬ垣根の内だに、雪間の草若やかに色づきはじめ」とあるが、当歌は歳暮の歌に詠み替えた。

(村上泰規)

舟中除夜

332 かめのうへの山をあひみる舟ならば老せし物を年はくるとも

白氏文集。不^レ見^ニ蓬^ヲ菜^ニ不^レ敢^テ帰^ル、童^男叩^女舟中^ニ老^テリ。

〔出典〕雪玉集、三六二二番。白氏文集、卷三、新楽府、海漫漫。

〔異同〕『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

〔訳〕 舟中の除夜

巨大な亀の背にあるという蓬莱山を共に見る舟ならば、(不老不死になれて) 年が暮れても老いることはないのに。白氏文集。蓬莱を見なければ決して帰るわけにはいかず、童男童女たちは舟の中で老いていく。

〔考察〕当歌の「亀の上の山」は蓬莱山を指す。『列子』湯問篇によると、渤海の遥か東に底なしの谷があり、その中にある五つの山のうちの一つが蓬莱山。そこには玉の木が群生して、その果実は美味で、食すと不老不死になるといふ。五つの山はもともと繋がっておらず、常に波に漂っていたので、天帝が十五匹の大きな亀の頭上に五山を載せ、入れ替わり三交代させることとし、六万年で一回りするようさせた。

『白氏文集』は『史記』始皇帝本紀第六の記事を踏まえる。秦の始皇帝二十八年に斉人の徐福が、「海中に仙人の住む神山がある」と始皇帝に上書したので、数千人の童男童女と共に出発させ、仙人を求めさせた。『白氏文集』は始皇帝の派遣した童男童女が蓬莱を求め、舟の中で老いていく様子を詠み、根拠のない仙人を求めることを戒める。「卯女みづな」とは、揚巻に結った童女のこと。『注好撰』下巻の「巨鼈負蓬莱、第二十九」にも童男卯女の記事を載せる。

当歌はこれらの故事を踏まえ、蓬莱山を目指す舟の中で除夜を迎えるという設定。蓬莱山を見つければ、不老不死の仙人になり年老いることはないが、それができないために舟の中で除夜を迎えて年を取る様子を詠む。

〔参考〕「亀の上の山もたづねじ舟のうちに老いせぬ名をばここに残さむ」(源氏物語、胡蝶の巻、一六七頁。船樂の場面)。

雑

旅

635 なにこともよく成ぬとのことつてを故郷人にきくかうれしき

いせ物語。「何事もみな、よくなりにつけり」となん、いひやりける云々。

〔出典〕雪玉集、四一四五番。伊勢物語、一六六段。

〔異同〕『新編国歌大観』「うれしき―うれしき」。『伊勢物語』ナシ。

〔訳〕 旅

「何事もみな良くなった」という伝言を、郷里の人から聞くのはうれしいなあ。

伊勢物語。「何事もみな良くなった」と言い送った云々。

〔考察〕『伊勢物語』は、旅に出た男が京にいる人に送った手紙の一節。それを踏まえて当歌では、旅の途中で出会った同郷の人から伝言を聞いた時の嬉しさを詠む。

(島田薫)

海路

636 浪かせは哀もかけし大しまのうらみをたれにうたふ舟人

玉かつらの巻云、舟子とものあらくしき声にて、「うらかなしくも遠く来にけるかな」とうたふを聞まゝに、

『三玉挑事抄』注釈 冬部(下)・雑部(三)

ふたりさしむかひてなきけり。舟人もたれをこふとかおほしまの浦かなしけに声のきこゆる

〔出典〕雪玉集、八〇八七番。源氏物語、玉鬘卷、九〇頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「浪―波」。『承応』『湖月抄』ナシ。

〔訳〕 海路

波風はあわれみの情もかけてくれないだろう。多くの恨みを誰に寄せて歌うのだろうか、大島の浦の船人は。

玉鬘の巻によると、船子たちが荒々しい声で、「うら悲しくも遠く来にけるかな」と歌うのを聞くと、娘二人は顔を見合わせて泣いた。船人も誰を恋しがっているのであろうか、大島の浦を過ぎつつうら悲しそうに歌う声³⁷が聞こえるなあ。

〔考察〕『源氏物語』は、玉鬘の乳母の娘たちが筑紫へ下向する船旅の中で船子たちの歌を聞き、京への思いや旅の心細さを和歌に詠む場面。当歌は「大島」に「多し」、「恨み」に「浦」を掛ける。

〔参考〕「浪風はあはれもかけじおほ島のうらみをたれにこたふ舟人」(雪玉集、五八八三番)。

(島田薫)

夕旅

637夕こりの岩かねさむしわか馬のくろかみ山は木々の下露

詩経。陟³⁸彼³⁹高岡⁴⁰我⁴¹馬玄黄。

〔出典〕雪玉集、二七四一番。詩経(上)、国風、卷耳、二二頁。〔異同〕『新編国歌大観』「詩経」ナシ。

〔訳〕 夕旅

夕方に凝り固まった霜や雪がついている大きな岩で寝るのは寒い。私の馬の黒いたてがみは、黒髪山の木々からし
たたり落ちる露（で黄葉するように黄色くなったなあ）。

詩経。あの高い尾根に登れば、私の黒馬は疲れ弱って毛色が黄色みを帯びてしまう。

〔考察〕『詩経』は出征の過酷さを歌った箇所。当歌は「岩が根」（大きな岩）に「寝」、「黒髪山」に馬の黒髪（鬣たてがみの意）を掛ける。「黒髪山」は二荒山（栃木県日光山）や佐保山（奈良市）など諸説ある。和歌の世界では、露や時
雨が葉を黄色や赤に染めると詠む。

〔参考〕「白露も時雨もいたくもる山は下葉したば残らず色づきにけり」（古今和歌集、巻五、秋下、二六〇番、紀貫之）。

（島田薫）

雑草通三径

638 誰を今松の緑も白きくもあれにしまゝの道をはらはん

〔出典〕雪玉集、三二三七番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 草を雑ひぎ、三つの道を通る

誰を今、待っているのだろうか。松の緑と白菊があつた所も荒れ果てたままだが、三つの道の草を払いのけ（て会
いに出かけ）よう。

〔考察〕当歌は「松」に「待つ」を掛け、光源氏を待ち続けた末摘花の荒屋を、これから訪れる源氏の立場で詠む。

（松田望）

639 里はあれぬいつれか三の道そともわかぬ蓬をはらひかねつ、

蒙求。三輔決録曰、詔^カ舎^中竹^下開^二三^徑。

歸去來辭。三徑就^テ荒^ニ松菊猶^ッ存^{セリ}。

蓬生卷。いつれか、此さひしき宿にも、かならず分たるあとある三の道とたとえる云々。

〔出典〕雪玉集、二二六―二二番。蒙求、蔣詡三逕、三八八頁。文選、歸去來、四五四頁。源氏物語、蓬生卷、三三八頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『文選』『承応』『湖月抄』ナシ。『蒙求』『舎中―舎中』。

〔訳〕(草を薙ぎ、三つの道を通る)

我が家の庭は荒れてしまった。どれが三つの道かとも分からないほど茂っている蓬を払い退けるのに苦勞しているよ。

蒙求。三輔決録によると、詔は屋敷内の竹林のもとに三本の小道を開いた。

歸去來辭。三つの小道へ向かうと、あたりは荒れ果てているが松や菊はまだ残っている。

蓬生の卷。どれだろうか、このようなわびしい邸にも、必ず踏み分けた跡があるはずの三つの道は、と探し当てるて行く云々。

〔考察〕『蒙求』は蔣詡が、竹林の中に三つの道を作った話。松・菊・竹を植えたことから「三徑」は隱者の庭園の小道を指すようになった。「歸去來辭」は陶淵明が役人生活から逃れ、帰郷した家の庭の松や菊を見て喜ぶもの。『源氏物語』は須磨から帰京しても通ってこなくなった光源氏を、生活に余裕がなくなり草が生い茂る家で待ち続けた末摘花を描く。当歌は、長らく訪れなかった家の荒れ果てた庭に生い茂る蓬を詠む。蓬は和歌では、荒廢した邸宅に生えるものとされる。

(松田望)

故郷

640 ふるさと、いふへくもあらずむつまじき名も藤原の花の都は

日本紀。持統天皇紀曰、八年十二月庚戌朔乙卯、遷_三居藤原宮_二。戊午百官拜朝。

〔出典〕雪玉集、五三九番、六五六番。日本書紀、卷第三〇、持統天皇、五四八頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『日本書紀』ナシ。

〔訳〕昔の都

旧都とは呼べないなあ。名前からして藤原氏になじみがある藤の花の都、藤原京は。

日本紀の持統天皇紀によると、八年十二月の庚戌朔の乙卯（六日）に、藤原宮に遷居なされた。戊午（九日）に、百官が天皇を拝した。

〔考察〕『日本書紀』は持統天皇八年（六九四年）、藤原宮への遷都を記す。当歌は「藤原」に藤原氏とその象徴である植物の藤を掛け、藤原宮への親しみを詠む。

(金子将大)

商山

641 見し人は春の都に出はて、月ひとりすむ秋の山かけ

四皓事実、註于山家路。

大明一統志、三十二、西安府。商洛山_ハ在_二商縣_一東南九十里。亦名_二楚山_一。即秦_ノ時、四皓隱_ル処云云。

『三玉挑事抄』注釈 冬部（下）・雑部（三）

『三玉挑事抄』注釈 冬部(下)・雑部(三)

〔出典〕雪玉集、八二五番。大明一統志、三三卷、西安府。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『大明一統志』「商縣―商州」。

〔訳〕 商山

顔見知りの人はみな春の都に出て行ってしまい、月だけが澄みきって住んでいる秋の山陰だなあ。

四皓の事柄は、「山家路」に注した(587番歌、参照)。

大明一統志、第三十二卷、西安府。商洛山は商縣の東南九十里にある。また楚山とも呼ぶ。すなわち秦の時代に四皓が隠れた場所である云々。

〔考察〕当歌は、世を逃れて商山に隠れた四皓(四人の老人)が乞われて都に出たあと、月だけが「すむ」「澄む」と「住む」を掛ける)状況を詠む。

〔参考〕『大明一統志』は中国、明代に国家事業として編集された地理書。その本文異同には正徳三年(一七二三)版『和刻本 大明一統志』を使用。

(金子将大)

書

642むすひても繩は其世にくちぬへしなかきためしや水くきの道

史記。太皞庖犧氏、風姓。代燧人氏^ニ、繼^レ天而王云云。造^ニ書契^ヲ、以^テ代^ニ結繩^ノ之政^ニ。

〔出典〕雪玉集、二五八五番。史記、三皇本紀、一七頁。〔異同〕『新編国歌大観』『史記』ナシ。

〔訳〕 書

結んでも繩はその時代に朽ちてしまふだろう。(それに対して)長く続く例だなあ、筆の道は。

史記。太皞庖犧氏は姓を風と叫ぶ。燧人氏に代わり、王位を継いで王になった云々。文書契約のやり方(木や骨に文字を書いて約束すること)を作り、結繩の政(文字がなかった時代に大事には太い繩を、小事には細い繩を結び、意思を伝達した古代の政治)に代えた。

〔考察〕『史記』によると三皇(庖犧氏・神農氏・女媧氏)の庖犧氏は、結繩を止めて文書契約に改めた。当歌はこれを踏まえ、繩は結んでもすぐに朽ちるが、書は長い間残ることを詠む。「水莖」は筆、筆跡、手紙を意味する。

〔参考〕『新編国歌大観』は歌肩に「文明十五自三月三日至六月十三日着到」とあり、当歌は文明十五年(二四八三年)の着到和歌。着到和歌は百日の間(この場合は三月三日〜六月十三日)、複数の参加者が指定の場所に集まり、定められた題で毎日一首ずつ詠む方式。

(金子将大)

硯

〔643〕墨筆をさそあた物とみる石のをのれしつかに世を尽しつ、

古硯銘曰、硯ト与ト筆墨、蓋シ氣類也。出処相近、任用寵遇モ相近シ也。独リ寿夭不ニ相近ニ也。筆ノ之寿、以レ日計ハ、墨ノ之寿、以レ月計ハ、硯ノ之寿、以レ世計ハ。

〔出典〕雪玉集、二五八七番。古文真宝後集、卷五、古硯銘、二五五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『古文真宝後集』ナシ。

〔訳〕 硯

(硯は) 墨や筆をさぞや、はかないものと眺めているであろう。硯自身は心静かに生涯を送りながら。

古硯銘によると、硯と筆墨とは思うに性質も働きも同じ仲間である。出て働くときも家で休むときも互いに近くにいるし、使われて大事にされることも似ている。しかし、その生命の長短だけは似ていない。筆のいのちは日にちで数え、墨のいのちは月で数え(るほど短い)、硯のいのちは世代で数える(ほど長い)。

〔考察〕唐子西の「古硯銘」では、鋭くよく動く筆や墨の命は短い、鈍く静かな硯の命は長いことから、硯のように静かに生きることが養生の法であると説く。

〔参考〕「古硯銘」に刻まれた銘の本文は以下の通り。「不能鋭、因以鈍為體。不能動、因以静為用。惟其然、是以能永年。」「訳」「私は鋭くなれないので、鈍いことをわが本体とする。私は動けないので、静かであることを自分の作用とする。ただそうであるからこそ、その性質により永年の命を保てるのだ」。

(北井達也)

車

644 ながらへはつかふる道に小車のかけてかひ有名をと、めはや

漢書。薛広徳伝云、乞骸骨ヲ賜ニ安車駟場黄金六十斤罷。広徳為ニ御史大夫一、凡十月ニシテ免、東ノ方ノ婦ル沛ニ。太守迎ニテ之ヲ界ノ上ニ、沛以為レ榮ト、懸ニ其ノ安車ヲ伝フ子孫ニ。註ニ、師古曰、懸ニ其ノ所レ賜安車ヲ、以示ニ榮幸ヲ也。致仕懸車亦古法也云云。

〔出典〕雪玉集、二五九〇番。漢書評林、卷七一、薛広徳。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『和刻本漢書』「乞骸骨―乞骸骨皆」「車亦古法也―車蓋亦古法」。

〔訳〕 車

長く生きられるならば、私の仕える道に小車を懸けるだけの価値ある名を残したいものだなあ。

漢書の薛広徳伝によると、(広徳は丞相定国と大司馬車騎將軍史高とともに) 辞職を願ひ、いずれも安車(老人用の車)と駟馬(四頭立ての馬車) および黄金六十斤を賜わり、職をやめた。広徳は御史大夫であること、およそ十か月で職を解かれ、東の方、沛群に帰ると、太守が広徳を郡の境まで出迎えた。沛郡では安車を賜わったことを光榮として、その安車を懸けてつるし(宝物として) 子孫に伝えた。師古の注によると、広徳がその賜わった安車を懸けることで光榮を示した。致仕懸車と言ひ、また昔のしきたりである云々。

〔考察〕 当歌は、広徳が辞職して帰郷した後、賜わった車を懸けてつるし後世に名を残したという故事を踏まえ、自身も広徳のように車を懸けられるほどの名を仕える道に残したいと詠む。「骸骨を乞う」とは、主君に一身をささげて仕えた身であるが、老いた骨だけは返していただきたいの意から、辞職を願ひ出ること。御史大夫とは御史台(官吏監察機関)の長官で、漢代には実質的な宰相。

〔参考〕 師古の注とは顔師古が『漢書』に付けた注釈で、唐代の貞観一五年(六四一)に完成。

輦車

645中の重の門ひきいる、小車のめくみことなるあとをみるかな

延喜式曰、凡乗輦車、出内裏者、妃、限曹子、夫人及内親王、限温明殿、後凉殿、後。

河海抄云、中の重を出入の為也。中重の輦車ともいふ也云々。

(北井達也)

〔出典〕雪玉集、二五九一番。延喜式、雜式。河海抄、卷一、桐壺卷、一九五頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『河海抄』ナシ。『延喜式』『温明殿—温明』。

〔訳〕 輦車

内裏の門へ小車を引き入れる(ことを許され、帝の)恩恵が格別である跡を見ることだなあ。

延喜式によると、総じて輦車に乗ったまま内裏に出入する場合、妃は自室まで(の乗車)に限り、夫人および内親王は温明殿または後涼殿の背後まで(の乗車)に限る云々。

河海抄によると、内裏を出入りするためである。中重なかのえの輦車ともいう云々。

〔考察〕『源氏物語』桐壺の巻では、帝の格別な寵愛を受けた桐壺の更衣は身分が低いにも拘らず重病のため、輦車に乗ったまま内裏を出入りできる「輦車てぐるまの宣旨せんじ」を下された。輦車は人が引く手押し車。内裏の中は歩行しなければならぬが、皇族・貴族・高僧などで特別に天皇の許可があった者だけが輦車に乗って通行できた。

〔参考〕雪玉集には「永正八六御月次」とあり、当歌は永正八年(一一五二)六月の月次歌。『延喜式』の本文異同には享保八年(一七二三)序の版本(早稲田大学古典籍総合データベース)を使用。

橋

(小森一輝)

646 かけていは、遠き道かは人の世も神代のま、の天のうきはし

神代卷曰、伊弉諾尊、伊弉册尊立ツク於天浮橋之上ニ共計曰云々。

〔出典〕雪玉集、三七四四番。日本書紀、卷一、神代上。〔異同〕『新編国歌大観』『日本書紀』ナシ。

〔訳〕 橋

(橋を架けるではないが) 心にかけて言えば、遠い教えではなからう。人の世になっても神世のままである天の浮橋(の教えは)。

神代巻によると、伊弉諾尊と伊弉冉尊は天の浮橋の上にお立ちになり、相談しておっしゃる云々。

〔考察〕当歌は今も語り継がれている天の浮橋の教えを、いつも心に思っていれば身近に感じられる、という内容。「かけて」の「掛く」は「橋」の縁語。

〔参考〕『日本書紀』は寛文九年(一六六九)版が流布していて、野村尚房も閲覧した可能性が高い。ただし刊本は非常に多く、これと断定できない。

(小森一輝)

647^柏ゆくすゑは只に過しとはし柱身を立る道やしるし置けん

蒙求曰、前漢司馬相如、字ハ長卿、蜀郡成都ノ人也。少好テ読書ヲ云云。旧注曰、蜀ノ城北七里ニ有ニ昇仙橋一。相如題ニシテ其柱ニ曰、「大丈夫不レハ乗ニ駟馬ノ車ニ不レ復タ過ニ此橋一」。

〔出典〕柏玉集、一六四四番、二一九〇番。蒙求、相如題柱、七七七、七七九頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「立る―たつる」(一六四四番)、「立る―たてる」(二一九〇番)。「蒙求」ナシ。

〔訳〕 (橋)

我が将来は凡庸に終わるものかと、橋柱を立てるではないが、身を立てる(立身出世の)道を(橋柱に)記しておいたのだろうか。

蒙求によると、前漢の司馬相如は、字は長卿、蜀郡成都の人である。幼いときから読書を好む云々。旧注によると、蜀城の北、七里のところに昇仙橋がある。相如はその橋柱に、「男子たるもの、(立身出世をして) 四頭引きの馬車に乗らなければ、二度とこの橋を渡ることはない」と書いた。

〔考察〕和歌の世界では「橋柱」といえば、『古今和歌集』仮名序に記された「長良の橋」と合わせて「長良の橋柱」と詠むことが多い。一方、司馬相如の故事に関連づけた歌は、「思ふこと橋柱にぞ書きつけて昔の人は位ましける」(堀河百首、一四三七番、橋、隆源)、「花にきて又こそとはぬ橋柱身をたつる道も外にもとめじ」(柏玉集、橋花、三三五番)など少ない。

〔参考〕『蒙求』は唐の李瀚りかんが編纂した書物で、南宋の徐子光によって増補注釈された。幼学書・教養書として盛んに用いられたため、日本古典文学に与えた影響は多大で、和刻本も多い。三条西実隆らが『蒙求』の講釈を受けた記述が『実隆公記』に見える。詳しくは、菅原正子『日本中世の学問と教養』(同成社 二〇一四年)「三条西公条と学問」を参照。

錦

(小森一輝)

648^同ふみにたにあひ思ふ程はしられしををるやにしきの色にみえぬる

事文類聚続集。晋ノ寶^カ滔^カ妻織^レ錦為^ニ廻文^ヲ詩^ヲ以^テ寄^レ滔。宛^ル転^ル循環、文^甚悽^ク惋^ク云云。

〔出典〕柏玉集、一六三九番。新編古今事文類聚、続集、卷二一、衾衣部、錦繡、織錦廻文。

〔異同〕『新編国歌大観』『新編古今事文類聚続集』ナシ。

〔訳〕 錦

手紙でさえ相思相愛の程度は分からないだろうが、錦に（思いを）織りこむと愛情が見えるなあ。

事文類聚続集。晋の竇滔の妻は錦を織り廻文の詩を織り込んで竇滔に贈った。方向を転じたり周囲を回ったりして読むと、文章はとても悲しい云々。

〔考察〕当歌は『事文類聚』に引用される『晋書』列女伝の内容を踏まえる。廻文詩は初めから読んでも末から読んでも意味が通じ、平仄も韻も合う漢詩。和歌の第三句「知られし」の「し」を過去の助動詞と見て、「知られた」とも訳せるが、「だに」は下に打消しを伴なうことが多いので「知られじ」と解釈した。

〔参考〕『事文類聚』の本文異同には寛文六年（一六六六）版（国文学研究資料文庫10、ゆまに書房、一九八二年）を使用。

（松本匡由）

和琴

649 こと笛の中にうへなきしらへあれや名こそあつまと立くたれとも

床夏巻云、あつまとこそ名も立くたりたるやうなれと、おまへの御あそひにも、まつふんのつかさをめすは、人の国はしらす、爰にはこれを物のおやとしたるにこそあめれ云々。

河海抄曰、和琴者伊奘諾・伊奘冊尊ノ御時、令_レ作出_二給_一云云。仍諸樂器ノ之最上_二置_レ之_一也。

〔出典〕雪玉集、三六四一番。源氏物語、常夏卷、二三一頁。河海抄、卷一一、常夏、四一二頁。

〔異同〕『新編国歌大観』『湖月抄』『承応』ナシ。『河海抄』『御時―御代』『置_レ之_一也―をかる、也』。

〔訳〕 和琴

管絃の中で、(和琴の他に)この上ない音律があるだろうか(、いや和琴が一番だ)。その別名は東あずまといって鄙ひなびて
いるけれども。

常夏の巻によると、東琴あずまこといってその名も鄙ひなびたものようだが、御前演奏でも真まつ先に書司をお召しにな
るのは、異国ではともかくとして、この国ではこれを第一番の楽器としているからだろう云々。

河海抄によると、和琴は伊弉諾・伊弉冉の時代にお作りになった云々。したがって(和琴は)あらゆる楽器の
中で最上位に置かれるのである。

〔考察〕和琴わごんの別名「東あづま」は都人がさげすむ東国を意味するので、『源氏物語』では「東とこそ名も立ち下りくだ」だが、
日本ではあらゆる楽器の中で和琴が最上である、と光源氏が話している箇所を当歌は踏まえる。

(松本匡由)

笛

650 天津人雲のかけはし打わたしさそふはかりの笛竹の声

狭衣物語云、まめやかにわふく吹出たまへる笛の音、雲井をひ、かしたまへるに中略「いなつまの光にゆか
む天の原はるかにわたせ雲のかけはし」と音のかきり吹たまへるは、けに月の都の人もいかてかおとろかさら
んとおほゆるに、楽の声くいとちかふなりて、むらさきの雲たなひきたると見ゆるに云々。

〔出典〕雪玉集、四三五〇番。狭衣物語、卷一、四二頁、四三頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『狭衣物語』「いかてか―いかてかは」「いとちかふなりて―いと、ちかうなりて」「た

なひきたる―たなひきわたる」。

〔訳〕 笛

天上に住む人が雲の架け橋を渡し、(演奏者を天上に)誘うほどの笛の音色だなあ。

狭衣物語によると、ほんとうは気が進まないながら吹き鳴らしなされた笛の音を、天上まで響かせなされて、中略「稲妻の光と共にわたしは天上に昇って行こう。大空の遙か彼方まで渡しておくれ、雲の架け橋を」と、音の続く限り笛を吹きなされたのは、ほんとうに月の都の人もどうして心を動かされないことがあるうかと思われたとき、奏楽の音がたいそう近づいて、紫の雲がたなびいていると見えて云々。

〔考察〕『狭衣物語』は宮中での管絃の遊びの折、狭衣が横笛を吹く場面。物語はその後、笛の音に魅せられて天稚御子が降臨し、狭衣が昇天しそうになるのを帝が引き止める、と続く。当歌は見事な笛の音色を、狭衣の音色に比類させて詠む。

〔参考〕『雪玉集』の歌肩に「永正三十二御月次」とあり、当歌は永正三年(一五〇六)十二月の月次歌。

(村上泰規)

対鏡知身老

651むかひみる影の外にも思ひしれあはれ老ゆく人をか、みに

唐書。魏徴薨。太宗臨朝^レ嘆^{シテ}曰、「以^レ銅為^レ鑑^ト。可^レ正^ニ衣冠^ヲ。以^レ古為^レ鑑。可^レ知^ニ興替^ヲ。以^レ人為^レ鑑。

可^レ明^ニ得失^ヲ。朕、常^ニ保^ニ此^三鑑^ヲ、内防^シ己^カ過^ヲ。今、魏徴逝^ス。一^ノ鑑^上亡^ス矣」。

〔出典〕雪玉集、二五九三番。新編古今事文類聚、続集、卷二八、鏡、常保三鑑。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『新編古今事文類聚統集』「唐書―ナシ」。

〔訳〕 鏡に向かい、身の老いを知る

(鏡に) 向かい映って見える(自分の) 姿以外からも思い知りなさい。無常にも老いていく人を鏡として。

唐書。魏徴が薨じた。太宗は朝廷に臨み嘆きながら言った。「銅を(加工して)鏡とする。(姿を映して)衣冠を正すことができる。昔を鏡とする。(歴史によって)世の興亡盛衰を知ることができる。人を鏡とする。(その人の諫言で)善悪を知ることができる。私は常にこの三つの鏡を持ち、自ら自己の過ちを防いできた。今、魏徴が死んで、一つの鏡が無くなってしまった」。

〔考察〕魏徴(生没五八〇〜六四三年)は太宗に仕えた唐の政治家で、皇帝に直に諫言することで有名。太宗は銅製の鏡のほか、歴史と人も鏡として自らの過失を事前に防いでいたという逸話を踏まえて、当歌は鏡で自らの姿を映し見るだけでなく、老いていく人を見ることによって我が身の老いを知りなさい、と詠む。鏡を見て身の老いを知る歌は、「鏡山いざ立ち寄りて見てゆかむ年経ぬる身は老いやしぬると」(古今和歌集、卷一七、雑上、八九九番、詠み人知らず)などがある。

〔参考〕『雪玉集』の歌肩に「永正六五御月次」とあり、当歌は永正六年(一五〇九)五月の月次歌。太宗の話は『旧唐書』卷七一のほか、『貞観政要』卷二、「資治通鑑』卷一九六にも見えるが、本作所引とは本文が異なる。

(村上泰規)

絵

652色とるも限こそあれ墨かきの山は幾重をた、みなしける

論語。素以為絢兮。

花鳥曰、雅兼卿記云、金岡ハ以墨ヲ疊レムコト山ヲ十五重、広高ハ五重也。

〔出典〕雪玉集、二五八六番。論語、八份第三、六六頁。花鳥余情、卷二、帚木。

〔異同〕『新編国歌大観』『論語』『花鳥余情』ナシ。

〔訳〕 絵

彩色するにも限界があ（り、やはり墨書さが重要であ）る。墨描きの山は（その輪郭を）幾重に描き重ねたのだからか。

論語。白粉オシロイで化粧して艶あでやかにする。

花鳥余情によると、雅兼卿記には、「金岡は墨で山を十五重に描き重ね、広高は五重に描き重ねる」とある。

〔考察〕『論語』は「巧笑倩兮、美目盼兮、素以為絢兮」（にっこり笑うと口もとがかわいらしく、目はぱっちりとして美しい）という詩の意味を、孔子が「絵で言えばまず彩色して、最後に胡粉で仕上げるようなものだ」と答えた箇所。『花鳥余情』（『源氏物語』の注釈書）は平安時代に活躍した絵師の巨勢金岡と、そのひ孫の巨勢広高を比較して、唐絵が盛んな平安前期には険しい山稜を幾重にも重ねたが、大和絵が最盛期になると峰はなだらかになり線描は少なくなつた、と記す。当時は彩色よりも、最初の下書きと最後の墨の描き起こしが重んじられた。当歌も絵は彩りよりも輪郭が重要だという視点から、金岡・広高の山の墨書さに思いを馳せて詠む。

〔参考〕『雪玉集』の歌肩に「永正二六御月次」とあり、当歌は永正二年（一五〇五）六月の月次歌。

（村上泰規）

舟

653 するへ有浪路となしにかめのうへの山を尋ねし舟のおろかさ

史記。徐福事実、見于恋部。

〔出典〕雪玉集、八〇八七番。〔異同〕『新編国歌大観』「浪―波」。

〔訳〕 舟

道しるべのある波路というわけではないのに、巨大な亀の背にあるという蓬莱山を探した舟は愚かだなあ。

史記の徐福の事は、恋部に見える。(466番歌、参照)

〔考察〕「亀の上の山」は37番歌、332番歌、413番歌にも見える。当歌は徐福の故事を踏まえ、無計画に蓬莱山を目指したことの愚かさを詠む。

(島田薫)

渡舟

654 心ゆく船出となしに渡し守いそくをみても詠めのみして

いせ物語云、其川のほとりにむれゐて、おもひやれば、限なく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、わたし守、「はや船にのれ。日もくれぬ」といふに云々。

〔出典〕雪玉集、一三三七三番。伊勢物語、第九段。〔異同〕『新編国歌大観』『伊勢物語』ナシ。

〔訳〕 渡し舟

気が晴れる船出ではないのに、渡し守が急ぐのを見ても物思いにふけてばかりいて。

伊勢物語によると、その河のほとりに集まりすわって、京に思いをはせると、果てしなく遠くに来てしまったなあ、と悲しみあつているところに、隅田川の渡しの船頭が、「早く船に乗れ。日が暮れてしまう」と言うので云々。

〔考察〕『伊勢物語』は東下りをする旅の一行が京に思いをはせる中、船頭が一同を急がせる場面。当歌はそれを踏まえて、気の進まない船出の様子を詠む。

〔参考〕雪玉集の歌肩に「永正二十一御月次」とあり、当歌は永正二年（一五〇五）十一月の月次歌。

（島田薫）

岸頭待舟

⁶⁵⁵急柏くらん舟出もいか、此きしのいさこのひかり苔青きかけ

銭起。水碧砂明両岸苔。

〔出典〕柏玉集、一六七四番。唐詩選、卷七、帰雁、七四二頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「いさこーいさり」。『唐詩選』「砂一沙」。

〔訳〕 岸辺で舟を待つ

急ぐような船出もどうしたものか。この岸の砂は耀き、苔は青々としているなあ。

銭起。水清く砂白く、両岸は苔むして。

〔考察〕銭起の「帰雁」は、雁はなぜ美景を見捨てて北に帰るのかと歌う。当歌も風景明媚な岸辺を離れる名残惜しみを詠む。

〔参考〕錢起の「帰雁」は雑部524番歌にも引用。和歌の第四句が「砂子の光」ではなく「漁りの光」ならば、漁火(夜、魚を誘うために舟で焚く火)を指す。

(島田薫)

浦舟

656 浦の梅かゝに雪の篷おすけさの舟人

錦繡段。和靖雪後看梅ル図詩。破暁湖山入画ニ時。短篷揺レ雪傍ニ疎籬ニ。一一心只在二梅華上。凍ニ損スル吟身一也レ不知。

〔出典〕雪玉集、二二七七五番。錦繡段。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『新刊錦繡段』「図詩」図「疎」疎「華」花。

〔訳〕 浦の舟

案内しておくれ。どこかの浦の梅の香(が漂う所)に。早朝に雪の積もった篷上を押している舟人よ。

錦繡段。和靖が雪の後に梅を見る図の詩。

明け方、(雪が降り積もった)西湖やそれを取り囲む山々の姿は美しく、まるで絵画のようである時刻、(和靖は小舟に乗って、梅を見に出かけた。)小舟が岸辺に達すると岸に積もった雪が揺れ動き、舟は粗く編んだ籬まがらのそばに停泊した。画中の和靖の気持ちはひたすら梅の花に集中して、寒さで詩を作る身が凍えてしまっても気がつかない。

〔考察〕和靖が梅花に心を奪われ、寒さに凍える身に気づかないほど詩作に耽っていることを当歌は踏まえて、自分

も雪の降り積もった早朝に舟を出して、梅の香りのする浦へ向かおうとする気持ちを詠む。和歌の「篷」は竹や萱かやなどで編んだ舟の覆い、漢詩の「短篷」は「今ハ小舟ノ事二用ソ」（貞享版『錦繡段』国会図書館蔵の書き入れ）により小舟と解釈した。

〔参考〕『錦繡段』については521番歌、参照。和清は北宋の詩人、林逋の号（生没九六七―一〇二八年）。梅花を植え鶴を飼い、「梅を妻、鶴を子とする」と言っていた。漢詩の作者は十三世紀に活躍した希叟きそう紹曇しょうどん、南宋の人で臨済宗の僧。

（松田望）

滄海雲低

657柏 隔来しおも影みせて浦しまや明行雲ぞ波にのこれる

浦嶋子伝、見于恋部。

〔出典〕三玉和歌集類題、雑上、滄海雲低。〔異同〕『三玉和歌集類題』ナシ。

〔訳〕 青海原に雲が低い

年月を隔ててはいるが、浦島の面影がいまだに見えて、（玉手箱を開けるではないが）夜が明けていくと、（玉手箱から出てきた）雲が波（の上）に残っているなあ。

浦嶋子伝は恋の部に見える。（464番歌、参照）

〔考察〕「明行」に「夜が明けていく」と「玉手箱を開ける」を掛ける。『浦嶋子伝』によると、浦島が神女の言いつけを忘れて玉手箱を開けると紫雲が立ち上り、浦島の顔は急に老人になり亡くなった、とある。

(松田望)

低

658 雲をしのく心やこもる小松原岡の草根にましる二葉も

李白詩、見于春部、松藤歌注。

〔出典〕雪玉集、二五七二番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 低

雲を押しにかけて伸びる心がこもっているのだろうか。小松原の岡の草根に混じる双葉にも。

李白の詩は春部の「松藤」歌の注に見える。(84番歌、参照)

〔考察〕李白の「南軒松」が松の成長を歌ったのを踏まえて、当歌は草の根に混じって生えている幼くも力強い双葉の生命力を詠む。「小松原」は小さな松が多く生えている原。

〔参考〕雪玉集は歌肩に「永正三十御月次」とあり、当歌は永正十三年(一五一六)十月の月次歌。

(松田望)

遠

659 もろこしの空にもしのふ心にや三笠の山の月は見えけむ

古今集の詞書、秋の部にしるしつけ侍り。

〔出典〕雪玉集、二五七四番。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。

〔訳〕 遠

唐土もろこしの空にも（日本を）懐かしむ気持ちから、三笠山の月は見えたのだろうか。

古今和歌集の詞書は、秋の部に書きつけています。（187番歌、参照）

〔考察〕安倍仲麿は唐の国で月を眺め、三笠山に出た月と同じだと詠んだ（『古今和歌集』の詞書による）ことを踏まえ、当歌は三笠山の月を懐かしむ気持ちから、唐の国の空にも同じものが見えたのだろうかと推量する。

（金子将大）

七

660 ことのをのいつの情に玉くしけ二の声をしらへそへけん

蔡邕琴操曰、五絃ハ象三五行一。大絃レ為レ君、小絃レ為レ臣。後ニ文武加ニ絃ヲ以取ニ剛柔一而合ニ君臣ノ之義ヲ。

〔出典〕三玉和歌集類題、雜、七。初学記、一六、樂部下、琴第一。

〔異同〕『三玉和歌集類題』ナシ。『初学記』「後文武―文王武王」「取剛柔而―ナシ」「君臣之義―君臣之恩」。

〔訳〕 七

琴の絃の五本の風情に（櫛箱の蓋ではないが）二つの音を調律して添えたのだろう。

蔡邕の琴操によると、五絃は五行を象っている。太い絃は君主であり、細い絃は臣下である。後に文王と武王が二絃を加え、（太い絃は君主の）剛直さ、（細い絃は臣下の）柔軟さに対応させ、君臣の間の義に一致させた。

〔考察〕『琴操』は文王と武王が五絃琴に二絃を加え、七絃琴が誕生したことを記した部分。五行は古代中国の思想で、万物を生じて変化させる木・火・土・金・水の五つの元素。君臣の義は儒教で説く五倫の一つで、君主と臣下

の間にある義の徳。「玉櫛笥」は櫛たくしげを入れる箱の美称、また「蓋」ふたなどにかかる枕詞。ここでは「ふた」と同音を含む「二つ」にかかる。

〔参考〕『琴操』は古代の琴曲と作者について後漢の蔡邕が解説した書。原本は散逸し、日本の昌平叢書と本作とは異同が多くあるので『初学記』を掲載した。

寄水雑

(金子将大)

661柏水もそのにこらはといひすめらはとおもふも人の世にそしたかふ

漁父辞曰、滄浪ノ之水清^テ兮、可^三以濯^二我纓^一。滄浪ノ之水濁^ラ兮、可^三以濯^二我足^一。

〔出典〕柏玉集、一八四七番。楚辞、漁父、二八〇頁。

〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『楚辞』「我纓—吾纓」「我足—吾足」。

〔訳〕 水に寄せる雑歌

(漁父が)「水もまた濁ったならば(足を洗おう)」と言ひ、「澄んだならば(冠を洗おう)」と(言ったことを)思うにつけても、人の世に従ひ生きるものだなあ。

漁父辞によると、滄浪の水が澄んだならば、それで私の冠を洗うことができよう。滄浪の水が濁ったならば、それで私の足を洗うことができよう。

〔考察〕「漁夫辞」は屈原と漁夫との会話から構成されている。たとえ世の人が俗にまみれていたとしても時勢に合わせ生きていくべきだと説く漁夫に対して、屈原は今、髪を洗った者は必ず冠の塵を弾いてかぶり、今、湯浴みをした

者は必ず衣の塵を振うものであるという喩えを引いて、清んだ者は世俗から離れるべきだと反論した。それに対して漁夫は出典の歌を歌い、人の世が清くても汚れていても、その中で順応して生きていくべきだと再び説いた。当歌は、人の世の清濁を滄浪の水に喩えた漁夫の言葉を踏まえて詠む。

(北井達也)

哀傷歌中

662 手をひらき足をひらくはそれなからさきたつ道やおやにかなしき

論語。曾子有^レ疾、召^ニ門弟子^ニ曰、「啓^ニ予^カ足^ヲ、啓^ニ予^カ手^ヲ。詩^ニ云、戦^々兢^々ト^トシテ、如^レ臨^ニ深淵^ニ、如^レ履^ニ薄^ニ冰^ニ」。

〔出典〕雪玉集、五六一五番。論語、泰伯、一七七頁。〔異同〕『新編国歌大観』『論語』ナシ。

〔訳〕 哀傷歌の中

(曾子が危篤の時に) 手を開き足を開い(て自分の体が無傷であるか調べさせ) たのは、誠に孝行なことではあるが、親よりも先に死ぬ子は、親に対して心が痛むだろうなあ。

論語。曾子が病気で危篤の時に、弟子たちを呼び集めて言うには、「夜具を開いて、私の手や足を調べて(身体はどこかに傷痕はないか) 見てくれ。『詩経』に、『深い谷の断崖に立って落ちるのを恐れるように、薄い氷を渡って割れはしないかと心配するように、戦^{おの}き恐れて身を慎む』とある」。

〔考察〕 曾子は危篤の際に弟子たちを呼び、自分の手足に傷が無いかを調べさせ、自身が父母から受けた体を大切に守るのは親孝行であると話し、体に傷一つ付けることなく死ぬ今からは、初めて父母に対する責任から解放される

と説いた。当歌は曾子の孝行を上への句に詠みこみ、下の句では親に先立つ悲しみを詠む。

〔参考〕小式部内侍が母の和泉式部より先に死にそうになったときに詠んだ名歌があり、当歌の下の句と共通する。「小式部内侍、病重くして、心弱く覚えける時、母を見て、声の下に、『いかにせむいくべき方もおぼほえず親に先立つ道を知らねば』。天井に感ずる声ありて、病癒えにけり。神明の御助けにこそ。」(沙石集、卷五末ノ一)。

(北井達也)

663春秋にとめるのこりの齡をは其たらちねにゆつりてや行

書言故事。漢斎襄上伝、皇帝春秋富云云。

〔出典〕雪玉集、五五九六番。書言故事、卷六、富春秋。〔異同〕『新編国歌大観』ナシ。『書言故事』「斎一斉」。

〔訳〕(哀傷歌の中)

年が若く残りの(長い)年月を自分の母親に譲り、(母より)先に逝ってしまったのだろうか。

書言故事。漢の斎襄上伝、皇帝は年齢が若い云々。

〔考察〕「春秋に富む」は慣用句。「春秋」は春と秋の意から転じて、年月・歳月の意味。年が若く経験に乏しいこと、また生い先が長く将来性があること。その出典は『史記』卷第五二、齊悼惠王世家第二二の「今高后崩、皇帝春秋富」による。当歌は夭折した子を悼む。

〔参考〕『書言故事』は宋の胡継宗が編纂した類書で、有名な故事を分類し出典を示して解釈を加えたもの。正保三年(一六四六)刊本(長澤規矩也編『和刻本類書集成 第三輯』所収)を使用。

(小森一輝)

664 たくひとてふたつたになき袖のうへの玉くたけ、む心をそしる

あふひの巻に、袖のうへの玉くたけたりけんよりも云々。

〔出典〕雪玉集、五六二番。源氏物語、葵、五〇頁。

〔異同〕『新編国歌大観』「くたけ、むくだけらん」。『承応』『湖月抄』「玉―玉の」。

〔訳〕（哀傷歌の中）

同じようなものさえ二つとない、袖の上の玉が砕けたという（古人の）気持ち（あの人を亡くした今になって）知ることだなあ。

葵の巻に、袖の上の玉が砕けてしまったというよりも云々。

〔考察〕出典は一人娘（葵の上）を失った親の悲痛な心情を、砕けた珠玉と比較した個所。過去推量の「けむ」があるので典拠があるらしいが不明。当歌は出典を踏まえ、かけがえのない人を失った哀傷を詠む。「玉」は宝石の意から派生して、大切なものの比喩に用いられる。

（小森一輝）